

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 2 日現在

機関番号：32642

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520595

研究課題名(和文)接辞の有無による語の統語的・意味的・形態的特徴についての研究

研究課題名(英文)The Syntactic, Semantic and Morphological Differences between Words with and without a Suffix

研究代表者

島村 礼子 (SHIMAMURA, Reiko)

津田塾大学・学芸学部・教授

研究者番号：80015817

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円、(間接経費) 420,000円

研究成果の概要(和文)：英語の限定形容詞は日本語のそれとは異なり、屈折接尾辞が付いていないため、上記の形が句であるのか語であるのか、俄には判断できない場合が存在する。複合語内部に生起しながら、意味の透明性が保持されているケース([small car] driver)や、通常の限定形容詞の語順の制限を破っているようなケース(Japanese [small car])である。また、英語には性質形容詞の他に、名詞に(多くの場合)ラテン語起源の接尾辞が付加された関係形容詞があが、後者は本来的に分類的功能をもつが故に、「関係形容詞+名詞」形は「性質形容詞+名詞」形とは異なり、名付け機能をもつことを主張した。

研究成果の概要(英文)：In English, unlike in Japanese, attributive adjectives are identical in form both in phrases and in words, because they are lacking in inflectional agreement suffixes. Due to this property of English adjectives, it is sometimes difficult to decide whether a certain 'adjective-noun' forms are qualified as phrases or words, as is illustrated with the compound 'small car driver', where the expression 'small car' seems to retain a semantic compositionally, or with 'Japanese small car', where the sequence 'Japanese small' exhibits a deviant word order. Furthermore, there are so-called relational adjectives as well as qualifying adjectives in English, and the latter are formed by attaching various Latinate suffixes to nouns, and they are considered to have a classifying function; 'relational adjective-noun' forms, therefore, are usually regarded as having a naming function.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学 英語学

キーワード：語と句の区別 接辞の有無 性質形容詞と関係形容詞 分類的功能 名付け機能 日英語の「形容詞+名詞」形

1. 研究開始当初の背景

研究代表者は、自身のこれまでの幾つかの研究(島村(2006, 2008), Shimamura (2001, 2003, 2007)等)において、同一あるいは類似の統語的・意味的・形態的特徴を持ついくつかの語に関して、接辞の付いた語と付いていない語とを比較対照すると、両者の間に相違点がみられることを示唆している。そこで、本研究では、そのような相違点についてより詳細に考察し、できる限りそれらの相違点に対する説明も行ないたいと考えた。

2. 研究の目的

本研究では、同一あるいは類似の統語的・意味的ないし形態的特徴を持つ語において、接辞(派生接辞ないし屈折接辞)の付いた語と接辞の付いていない語とを互いに対比することにより、両者の間に見られる相違点を明らかにし、さらに、可能なら、それらの相違点の説明を試みることを目的としている。本研究で接辞の付いた語と付いていない語との対比を行なう場合には、英語内ないし日本語内で観察される両者の相違について考察するケースと、英語と日本語の二言語間で観察される両者の相違を考察するケースと、両方を含むものとする。なお、本研究において、上記の目的で具体的に取り上げる事項は、(i) 英語の名詞化、(ii) 動作主などを表す英語および日本語の動詞由来名詞、(iii) 英語と日本語の「形容詞+名詞」形である。

3. 研究の方法

(1) 本研究に関係する和書・洋書の書籍を購入し、学術雑誌に掲載された国内外の論文を入手するとともに、ネットで常に最新の研究成果をチェックするようにした。その上で、個々の研究で示された具体的な提案や分析を綿密に検討することを常に心がけた。また、研究を継続していくうちに、最新の文献や論文ばかりではなく、1960年代~1980年代に出された書籍や論文で、現在ではあまり言及されないようなものの中にも、本研究と密接に関係すると思われる提案や主張をしているものが幾つもあることが分り、そのような書籍や論文にも目を通し、要点を整理するようにつとめた。

(2) 理論的な仮説や提案は、具体的な言語事実による支持が不可欠である。そこで、英和辞典、英英辞典、国語辞典、逆引き辞典、接辞の辞典などを活用するだけでなく、コーパスを頻りに検索した。便利であり、よく用いたコーパスは、

a) Corpus of Contemporary American English (COCA) (<http://corpus.byu.edu/coca/>)

b) WebCorp: Web as Corpus (<http://www.webcorp.org.uk/live/>)

である。前者は現在ではよく知られた大容量のコーパスである。後者のコーパスは、Web

全体をそのまま検索すると英語が母語ではない者による英語のデータが大量に検索されてしまう可能性があるため、そのようなデータをできるだけ排除するため、siteを予めいくつか限定して検索した。なお、日本語のデータに関しては、「青空文庫」や「中納言」「少納言」だけでなく、必要に応じて日本語のWebもコーパスとして活用した。

(3) 先行研究を参照しても、語であるのか句であるのか、すぐには判断し難い特定の「形容詞+名詞」形(例: Japanese small car)について、それらを具体的に取り上げて考察する際、7つのonlineの英語辞典を検索し、互いに比較対照した。その結果、上記のような形は辞書ごとに記載の有無に関して異なるのではないかと予測されたが、事実はその通りであることが明らかになった。

(4) 本研究期間中に出席した学会、研究会、講演の中で、特に有益だったのは以下である。
a) 15th International Morphology Meeting: Morphology and Meaning (Vienna University of Economics and Business, February 9-12, 2012)

上記学会では、諸言語の複合語、「名詞+名詞」形の複合語の名付けの機能を証明する実験等、興味深い発表が多くあった。

b) 日本言語学会第145回大会(2012年11月24、25日九州大学(箱崎キャンパス))
上記学会では、ワークショップ「脳から見た言語理解研究」に参加、そこでの発表と質疑応答は、主要部名詞の前に生起する2つの形容詞の語順が通常の語順に違反するようなケースについて、脳の実験結果にもとづいた説明をしている文献を理解するのに多いに役立った。

(5) さらに、以下の講演は、形態論の研究で第一人者のMark Aronoff氏によるものであり、本研究において、形態とレキシコン、形態と統語と意味との関係について基本的な事項を整理するのに有益であった。

a) “Semantics and Morphological Categories” (2014年1月31日、NINJALコロキウム、国立国語研究所)

b) “Competition and the Lexicon” (2014年2月1日、レキシコンフェスタ、国立国語研究所)

4. 研究成果

(1) 英語の名詞化接尾辞の有無による相違点、およびその説明。

英語の名詞化に関する従来の研究では、Grimshaw (1990)等多くが、名詞化接尾辞は複雑事象名詞と結果名詞のいずれかを生成すると仮定していると思われる。それに対して、本研究(主として島村(2011)とGrimshaw (2004)においては、名詞化接尾辞は基本的に

は複雑事象名詞のみを生成し、結果名詞はそこから二次的に導かれるという分析をしている。後者の考え方は Alexiadou and Grimshaw (2008) に概略が示され、もとは Grimshaw (2004) が提案したものであり、Grimshaw (2004) はこの考え方を「2段階提案」(two stage proposal)と呼んでいる。(後者の論文は公開されていないので、本研究にあたって、Grimshaw 氏自身に頼んで送ってもらうことができた。)

上記の提案を採用することによって、まず、接辞付き名詞の場合、複雑事象名詞の用法しか持たないものは存在しても(例: fossilization)、結果名詞の用法だけのものは決して存在しせず、逆に、接辞無し名詞の場合は、もともと複雑事象名詞にはならないので、結果の解釈だけをもつ名詞があっても(例: open (空き地)) 何ら問題ではなく、むしろ当然といえる。

次に、接辞付き名詞は基本的に複雑事象名詞であり、ゼロ名詞は複雑事象名詞にはならないという違いは、何に起因するかということ、動詞由来名詞が複雑事象名詞であるためには、その動詞由来名詞が複雑事象名詞であることを形態的に明示しなければならず、その働きをするのが種々の名詞化接辞(-ation, -ment, -al, -ure, -th 等)である、ということである。

Grimshaw(2004)が「2段階提案」をした最も強力な根拠は、接辞無しの名詞は接辞付きの名詞と違って複雑事象名詞にはならないということであった。それに対して、本研究では、複雑事象名詞として用いられるゼロ名詞が実際に存在し(例: the frequent release of the prisoners by the governor)、かつ、そのような接辞無し名詞の場合、話者によって容認性の判断に違いが見られるということ(このことは、Borer (2003), Newmeyer (2009), Pesetsky (1995), Wechsler (2008) 等で示されている接辞無し名詞の容認性の判断の違いから明らかである)に注目して、その理由として、そのような接辞無し名詞の容認性が頻度に依存するからであろうということを中心とした。この主張は、いくつかの先行研究で具体的に示されている接辞無し名詞 40 個ほどの各々取り上げて、本研究において、各々が複雑事象名詞として用いられている実例の数をコーパスの COCA で調べた結果にもとづいている。接辞無し名詞に、接辞付き名詞には見られないこのような特異性が観察されるのは、接辞無し名詞には複雑事象名詞であることを示すためのマークとしての接辞が無いからであると考えることができよう。動詞由来名詞が複雑事象名詞であることを形態的に表示する必要があるのはなぜかということ、おそらく有標性の観点からの考察が可能であると思われる。

英語の名詞化における接辞の有無による違いについては、以上であるが、接辞無し名詞の容認性が頻度に依存するという上述の提

案は、今後さらに、COCA の正確な検索結果と統計による裏付けが必要である。上述の有標性の観点からの議論も今後の研究で具体的に展開していきたい。さらには、英語以外の他言語に関しても、本研究および Grimshaw(2004)の「2段階提案」が成り立つかどうかを検討することも必要であろう。

(2) 日本語の動作主名詞の接辞の有無による相違点、およびその説明。

これに関しては、本研究の期間内に論文として公開することができなかったが、考察したことに関して、以下に要点を述べる。できるだけ早くきちんとした形で研究成果を公表したいと考えている。

日本語で動作主を示す種々の形態素(「-手」、「-主」、「-者」等)が複合語の第一要素ではなく接尾辞であることを示す必要がある。以下がその証拠である。

通常、複合語の非主要部の要素を複合語の外の要素と統語的・意味的に関連づけることはできない(例: 「話し上手」 vs. 「*英語の話し上手」, 「操縦ミス」 vs. 「??ヘリコプターの操縦ミス」(cf. 「パイロットの操縦ミス」), 「研究熱心」 vs. 「??言語学の研究熱心」)(英語も同様であり、例えば *The dandelion is a healing-plant of many ills.)。しかし一方、上記のような動作主を示す形態素が動詞のあとに表れている形の語では、語の外にある名詞句を、動詞の内項と解釈することが可能である(例: 「送り手」-「手紙の送り手」, 「売り主」-「宝石の売り主」)。したがって、動作主を示す「-手」や「-主」等は、派生語の主要部として機能する接尾辞とみなすべきである。

英語では、接辞無しの動作主名詞の場合、通常は基体動詞の内項が統語的に外部に表出することは許されず、複合語内部に生起しなければならない(例: (a) tour guide vs. *(a) guide of the tour)(cf. このことは、接辞の付加されない動詞由来の行為名詞に関しても同様である(上の 4-(1)参照)。一方、英語では、接辞-er の付いた動作主名詞の場合には、動詞の内項が統語的に外部に表出することも、複合語内の非主要部位置に表出されることも、両方可能である(例: (a) driver of the truck, (a) truck driver)。英語に対して、日本語の場合には、英語と違って、「-手」など接辞付きの動作主名詞の場合には、内項が「~の」の形で外部に表出されなければならない、必然的に事象の解釈をもつことにある。内項が複合語内部に生起することは許されない。例えば、以下の a)と b)を対照。

a) 手紙の送り手 vs. *手紙送り手
アパートの貸し主

vs. ??アパート貸し主

b) 羊飼い vs. *羊の飼い
小説書き vs. *小説の書き

a)と b)の違いに関しては、次のように説明さ

れ得ると考えられる。つまり、a)のように「-手」という接辞の付いた動作主名詞の場合には、「-手」の基体は和語動詞でなければならないという制限があり、他方、接辞無しの動詞から導かれた転成名詞の場合には、その動作主を意味する転成名詞は、「名詞+動詞(連用形)」形の複合名詞のもつ複数の可能な解釈のうちの一つであると仮定することによって、説明することができる。和語動詞の場合には、例えば「送る」「貸す」は可能でも、「*手紙送る」「*アパート貸す」のような複合語は容認されない。それに対して、同じ動作主名詞でも、漢語の動名詞に「-者」のついた名詞の場合には、動名詞の内項が動作主名詞の外部に表出されていても、複合語内部に生起しても、どちらも可能であることに注意したい(例:「荷物の運搬者」,「荷物運搬者」)。また、動作主を意味する転成名詞の基になっていると考えられる「名詞+動詞(連用形)」形の複合名詞のステータスに関しては、これまでのところ、内心複合語とみなす考え方(Fábregas and Scalise (2012)、影山(1993))と、外心複合語とみなす考え方(影山(2009: 515))と、両方が提案されている。どちらの分析が妥当か、本研究では結論を示すことはできない。なお、英語における動作主を示す動詞由来名詞に関しても、接辞の有無による違いについて扱う予定であったが、本研究の期間内に十分考察することができなかった。

(3) 英語と日本語の「形容詞+名詞」形
本研究ではさらに、限定形容詞と主要部名詞から成る構造を扱った。英語と日本語における限定形容詞の形態を比較すると、英語では、限定形容詞が(複合)語の内部に生起しようと句の内部に生起しようと、屈折接尾辞が付加されないのが、形態が同一で区別が見られない。それに対して、日本語の場合には、限定形容詞は、(複合)語内部では語根の形で現れ、一方句では連体形の活用語尾を伴って現れる。したがって、日本語の場合は「形容詞+名詞」形が句であるか語であるかを見極めるのは、そんなに難しいことではない。「暗い部屋」と「暗室」では、前者は句、後者は複合語であることは明らかであろう。しかし英語の場合、限定形容詞に屈折接尾辞が付かないので、この形の表現の中には、語であるか句であるか、俄には判断の下しにくいものがあるのではないかと推測される。
いくつかの先行研究(Downing (1977), Olsen(2000), Bauer (2003)等)で、語と句の違いの一つとして、語は名付け(名前)、句は陳述であるということが言われてきた。英語の「形容詞+名詞」形の場合、語と句の区別が日本語ほど容易ではないということになれば、この形は、語は名前、句は陳述という上述の考え方の妥当性を吟味するには打って付けの形であると言えることができよう。本研究では、主として以下のことを主張した。

「形容詞+名詞」形の中には、その形容詞が本来は性質形容詞であっても、性質形容詞としての意味機能を失って、主要部名詞によって示される類(タイプ)の下位類(下位タイプ)を導くという「分類的機能」しかもたないものがある。そのような「形容詞+名詞」形は、名付け表現(名前)とみなし得る。

明らかに複合語である「形容詞+名詞」形(例: blackbird)だけではなく、複合語内部の非主要部に生起して意味の合成性を保持している「形容詞+名詞」形(例: [fresh fish] shop)も、形容詞が分類的機能をもつと言える。これら2つの「形容詞+名詞」形では、形容したがって、詞が分類的機能をもつという点では共通しているが、構造は異なり、前者は $[N_0 A N]$ 、後者は $[N_0 A^0 N^0]$ の構造をもつ。後者の複合語の非主要部に生起する透明な「形容詞+名詞」形は、統語構造で生成される「形容詞+名詞」形が拡張的に複合語内部に生起した形と考えたい。

英語の限定形容詞は、基底で名詞を修飾する「直接的修飾」であり、それに対して、日本語の限定形容詞は(縮約)関係詞節の構造をもつ形容詞が名詞を修飾する「間接的修飾」である。間接的修飾の場合は、複数の形容詞が連続して生起する場合、語順は自由であるが、直接的修飾では、形容詞の語順に制限があり、この制限は通言語的にも類似すると言われている。

主要部名詞の直前に現れる形容詞が通常の限定形容詞の語順の制限に違反している場合も、その形容詞は分類的機能を持っている(例: local [fresh air])。

名詞と形容詞を比較すると、一般に、名詞は類に言及するが、通常(性質)形容詞は名詞と違って、類に言及することはできない。

英語には性質形容詞の他に、(多くの場合)ラテン語起源の接尾辞が名詞に付加されている関係形容詞があるが、関係形容詞は性質形容詞とは異なり、本来的に分類的機能をもつ。関係形容詞は最も名詞らしい名詞であり(つまり名詞から転換によって派生する形容詞であり(cf. Beard (1995)), 最も主要部名詞に近い位置に生起する形容詞である(cf. Vendler (1967))). 名付けと言うことから言えば、例えば geothermal energy は<地熱エネルギー>という(下位)類に言及するために用いられる英語の名前ということになる。

上の環境に生起する場合の形容詞、および関係形容詞の他にも、主要部名詞と共に用いられて分類的機能を果たすと考えられる要素がある。「属格's付き名詞+名詞」形(例: woman's magazine)、「名詞+前置詞句」形(例: house of worship)、「名詞+名詞」形の複合語である。その他さらに、日本語の「名詞の+名詞」形の中にも分類的機能を持つものがある(例:「木の橋」)。

上で指摘した分類的要素と主要部名詞から成る形に共通する意味的・統語的特徴としては、(i) 分類的形容詞は他の性質形容詞あ

るいは程度の副詞によって修飾されることは認められない、(ii) 分類的功能を持つ要素が名詞である場合には、その名詞は非指示的である、(iii) 分類的功能を持つ要素と主要部名詞の間に性質形容詞を挿入することはできない。つまり主強勢が分類的功能を持つ要素に置かれるのか、主要部名詞に置かれるのかに関しては、先行研究の指摘が一致せず、本研究では具体的な提案はできない。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 2 件)

島村 礼子、語の構造と名付けの機能の関係について 「形容詞+名詞」形と「形容名詞(形容動詞)+名詞」形の複合語の場合、津田塾大学紀要、査読無し、第 44 号、2012、pp. 37-67

島村 礼子、英語の動詞由来名詞を導く接尾辞について、佐藤 響子、井川 壽子、鈴木 芳枝、古谷 孝子、松谷 明美、都田 青子、守田 美子(編)、ことばの事実をみつめて：言語研究の理論と実証、査読無し、2011、pp. 79-89 開拓社

〔図書〕(計 1 件)

島村 礼子、開拓社、語と句と名付け機能 日英語の「形容詞+名詞」形を中心に、2014(6月)、208

6. 研究組織

(1)研究代表者

島村 礼子 (SHIMAMURA, Reiko)
津田塾大学・学芸学部・英文学科・教授
研究者番号：80015817